

ヘンリー・ジェイムズ 「国際挿話」

堤 千佳子

I

作家ヘンリー・ジェイムズは劇作に取り組んだ中期を除いては、生涯のテーマとして、国際テーマと呼ばれるアメリカ人によるヨーロッパでの体験、及びアメリカとヨーロッパの対峙を追及し続けたということができる。これは新世界としてのアメリカと旧世界としてのヨーロッパ、物質文明と伝統を誇る長い歴史、そして何よりも、アメリカの無垢（American Innocence）とヨーロッパの経験（European Experience）の対比を試みて、主人公の自我の確立、意識の成熟を取り上げたものである。

ジェイムズの作品をその創作時期に応じて初期、中期、後期または円熟期（the Major Phase）のものに分類することができる。彼は初期の段階では、国際テーマを扱ったものの習作に着手し、中期においては劇作に専念して失敗し、再び「国際テーマ」に戻り、後期の三つの長編作品を完成させた。彼の幾つかの「国際テーマ」を扱った作品の中でも、初期のものと後期のものとはテーマの扱われ方が大きく異なる。初期においては、アメリカとヨーロッパの対比に重きが置かれているのに対し、後期では、国際テーマそのものよりも、それに題材を取った意識のドラマが主眼となっている。また初期の作品の中でも、短編と初期の集大成とも言える『ある貴婦人の肖像』（*The Portrait of a Lady*）とでは手法においてもテーマの掘り下げ方においても全くと言っていいほど違いが顕著である。この作品は後期の意識のドラマへと発展する過程をはっきりと示している。

「国際テーマ」を取り扱った数ある作品の中で、本稿で取り上げる「国

「国際挿話」(An International Episode) だけが、そのタイトルに「国際」の二文字が用いられている。当時、財産のあるアメリカ人達がどんどん海外旅行するようになり、そのためヨーロッパの人達、あるいはヨーロッパに長く住んだため、すっかりヨーロッパ人化してしまい、アメリカ人としてのルーツを失い、ヨーロッパ人よりも因習やマナーにこだわるようになったアメリカ人との間に確執が起こるようになった。この作品も含めて、初期の短篇にはそのような風俗を初めとするアメリカとヨーロッパの違い、その結果起きる事件や、それに巻き込まれる人々を扱ったもの、言わば、一種の“comedy of manners”と見なす事ができるものが多い。この「国際挿話」もそういった事例のひとつである。

ジェイムズの「国際テーマ」の作品には欠かすことのできない人物としてアメリカン・ガールの存在があげられるが、ジェイムズは『女性の立場は我々の社会生活において最も顕著で、特徴ある位置を示している。』¹⁾ という確信をもっていた。これは19世紀に産業界における急速な発展によって、女性の立場も向上したという歴史的事実にも結び付いている。²⁾

「国際挿話」の主人公もその一人である。この Bessie Alden は初期の代表作である「デイジー・ミラー」(Daisy Miller) の主人公 Daisy から『ある貴婦人の肖像』の Isabel Archer に至る過渡期的人物であると考えられる。取り上げられることの少ない作品ではあるが、この点からも見落すことのできない作品である。

II

この作品の特徴はその対称性にあると言える。前半はアメリカにやって来た2人のイギリス人の体験を取り上げ、後半ではヨーロッパを旅行しているアメリカ人女性がロンドンで再びイギリス人男性と出会うという筋である。それぞれ相手の国で一種のカルチャーショックを受け、相手を本当に理解しないまま別れていくのである。

イギリス貴族、Lord Lambeth はいとこであり、お目付け役でもある Percy Beaumont と New York を訪れ、知人から紹介された Mr. West-

gate を訪問する。そして彼の妻が避暑のため過ごしている New Port へ赴き歓迎を受ける。彼らの感じるアメリカの印象として新しさ、若さが強調される。使われている言葉に、*crude, newness, without its picturesque side, juvenility*³⁾ などがあげられる。Lambeth は Beaumont に比べ偏見の無い目でアメリカをとらえようとしている。アメリカに対しても同様で、その美点を積極的に評価しようとしている。

彼のこの人物像は『ある貴婦人の肖像』の Lord Warburton にもつながる。一方、Beaumont は反対に、アメリカにもアメリカ人にもあまりよい印象を持っておらず、Lambeth が貴族であることを非常に強く意識している。自分が貴族の従兄でありながら、貴族ではないということが影響しているとも考えられる。後半において Bessie が先入観無く、イギリスでの経験を楽しもうとすることと重なり合う。

Bessie は姉の Mrs. Westgate とは対比的に扱われる。姉は幾度となくその美しさが繰り返され、才気があり、自由に生活を楽しみ、客のもてなしにも長けている。

She was extremely light and graceful, elegant, exquisite. Mrs. Westgate was extremely spontaneous.⁴⁾

そして、彼女のこの容姿に関する形容は Daisy Miller の場合とよく似ている。一方、Bessie はその容姿よりも内面性、特にその知性に重点を置いて描かれている。

Miss Alden was very different ; she was in a different style altogether. Some people thought her prettier, and, certainly, she was not so sharp. She was more in the Boston style, she had lived a great deal in Boston and she was very highly educated. Boston girls, it was intimated, were more like English young ladies.⁵⁾

ジェイムズの作品中、女主人公に関してはほとんどの場合、その美しさ

が強調されることはない。これは Isabel Archer にしても、また後期の 2 作、『鳩の翼』(*The Wing of the Dove*) にしても『黄金の盃』(*The Golden Bowl*) にしても同様である。ただし、内面を見る洞察力のある人には、その美しさは評価の対象となるのである。

ここで問題となるのは Boston style とはどのようなものであるのかということである。Boston と対比的に用いられている New Port は当時避暑地として人気があり、ジェイムズ自身も青年期を過ごしている。ジェイムズはこの街のことを「より完成され、洗練され、完全なものである」と評し、この街を従妹のミニーと結びつけている。ここでもアメリカン・ガールである Bessie にミニーの面影が重ねられている。一方、Boston は歴史のある町として知られ、商業の中心である New York、リゾート地である New Port と較べておもむきがあり、落ち着いた印象を与える。また、アメリカの教養を代表する町 (the most intellectual town) としても描写されているが、やはりヨーロッパとの比較の対象にはならない。しかし、アメリカの他の町よりも古く、イギリスに近いものがあるとされる。また、古さと同時に『ボストンの人々』(*The Bostonians*) で描かれているように急進的なフェミニスト達も存在しているという、二面性がある。Boston を代表するような Bessie も「生来、落ち着いて、控え目な人物であり、人と親しくつきあうような姉の資質をもっていない⁶⁾」と述べられているが、ヨーロッパにひどく魅了されていて、その好奇心が後に誤解を生んでしまう。

彼女に関して何度か繰り返される形容詞に“bookish”がある。これは彼女が実際に読書家で、教養があることを示すと同時に、彼女の知識はあくまでも書物から得たものに偏り、実際の経験によって得たものは非常に少ない、あるいは皆無に近いことを示している。そしてこの傾向は彼女の独善性にもつながりうる。そこに彼女の純粋さ (innocence) があるともいえるが、自分の主観や価値観だけを信じる彼女の態度には傲慢ささえ伺うことができる。ジェイムズも Bessie のことを「ひどく自信過剰である」(devilish positive)⁷⁾と評している。

Beaumont はアメリカの娘たちは皆、イギリス人の財産や地位目当てで彼らを釣ろう (try to hook) としているという先入観や偏見にとらわれ、また Lambeth の母親からしっかり監視するよう頼まれていた事もあり、Bessie の言動を最初から色眼鏡で見えてしまい、彼女の本当の姿を見ようとしな。また、Bessie の Lambeth への興味も、彼女にしてみれば単に貴族というものへの関心を、Lambeth という個人にたまたまあてはめてみたものに過ぎないが、警戒心でいっばいの Beaumont にしてみれば、Lambeth 個人への打算的なものに見えてしまうのである。他の「国際テーマ」を扱った作品では、アメリカン・ガールたちのほうがその財産を狙われ、ヨーロッパ人やヨーロッパ化したアメリカ人の罠にかかるという設定がなされている。この点からもこの「国際挿話」は他の作品とは異なっている。

Bessie に魅かれていく Lambeth に危惧を抱いた Beaumont は Lambeth の母親に警告の手紙を書き、イギリスからの偽りの手紙によって Lambeth は帰国することになり、再会を約束する。

後半は姉と一緒にヨーロッパを旅している Bessie が London を訪れるところから始まる。

当時女性が男性の介添え無く、旅行することはもはやそれほど珍しいことではなく、ジェイムズの作品では、このような女性だけの旅行の場面を目にすることができる⁸⁾。但し、彼女達は少数の例外⁹⁾を除くと、一様に経済面での自立の手段を持たず、男性の収入によって生活し、旅している。男性にとって女性は自分達の成功の度合いを示す道具でもあった。ジェイムズの作品中、アメリカにおける男性と女性のつながりは、あまり描かれることはなく、特に親子関係は、作品の冒頭で既に死亡していたり、あるいは単なる経済的關係のみとされている。登場するアメリカ人男性は、既に引退生活を送っていたり、ヨーロッパ人化している者がほとんどであり、精力的に活動し、男性らしさが強調される人物はほとんどいない。

ジェイムズの作品中では、男性の登場人物が画一的で、生き生きと描写されていないと評されることが多い。ジェイムズ自身、自分はアメリカの

男性についての知識はあまり無いと告白している。これは彼の家庭環境そのものが、いわゆる実業とはかかわりの無いものであったためと言える。彼の祖父はアイルランドからの移民で成功した実業家であったが、父のヘンリーはその遺産によって生涯、職業につくことも無く、悠々と思索の生活を送り、後にスウェーデンボルグの神秘思想に深く影響を受けている。また彼自身も、哲学者である兄のヘンリーも生活の糧を得るために働くというようなこともなかった。このようなことが、彼の作品におけるアメリカ人男性の不在の原因の一つといえる。

後半において、前半と大いに異なるのは、Mrs. Westgate の態度の変化である。何度も海外旅行の経験があり、アメリカでは自信に満ちていたはずの彼女が London においてはイギリス人、特に上流社会の人々に対して、猜疑心に取り付かれたように、異常なまでに身構えている。知り合いのアメリカ人が恩を仇で返されたというイギリス人不信を招くような経験を知ったためとも言えるが、彼女の自信がヨーロッパの伝統と歴史を前にして揺らいでしまったためとも思える。旅行者としてあちこちの国を訪ね、パリで買物をするには何のためらいもないが、そこで実際に暮らす人々、殊に貴族というアメリカには無い、階級制度の象徴ともいえるものに対し、彼女の態度は保身と攻撃に集中している。ジェームズの他の作品によく見られるヨーロッパ人化したアメリカ人のように、慣習に過敏なまでの反応を示すようになる。

一方、Bessie は非常な期待を持ってヨーロッパを訪れようとしている。知的な好奇心の強い彼女は興奮の気持ちを押さえがたい。

Bessie Alden had felt much excited about coming to England ; she had expected the "associations" would be very charming, that it would be an infinite pleasure to rest her eyes upon the things she had read about in the poets and historians.¹⁰⁾

前述したように、彼女の興味の大半はあくまでも書物から得た知識の断

片であって、実際の生活、そこに住む人々の様子などに目を向けようとはしない。彼女の視線は自己の世界の中でのみ活発に動き回ろうとしているにすぎない。彼女の弱点もまたそこに存在する。Bessieにとってこの初めての海外旅行は“picturesque”という言葉がひとつのキーワードとなっている。

She was very fond of the poets and historians, of the picturesque, of the past, of retrospect, of mementoes and reverberation of greatness; so that on coming into the great English world, where strangeness and familiarity would go hand in hand, she was prepared for a multitude of fresh emotions.¹¹⁾

彼女にとって“picturesque”は“ancient”とほぼ同義である。それはアメリカには存在しないものであり、当時のアメリカ人達が憧憬の念を持って眺めた世界がある。これはジェームズ自身にもつながることである¹²⁾。作品中でも「ヤンキー娘たちは“picturesque”なものにひどく弱い¹³⁾」とか、「崩れかけた庭園ほど魅力的なものはないと思う¹⁴⁾」などと描写されている。

BessieはLondonでもアメリカと同じように振る舞おうとする。一方、イギリスに来て以来その慣習に敏感になっているMrs. Mestgateは妹に『ここはあなたのよく知っている無邪気な(innocent) Bostonとは違う¹⁵⁾』と忠告する。ここで用いられている“innocent”とは何の先入観や偏見を持たずにあるがままの姿も受け入れるということと同様に、「アメリカ人は皆、善良(good)である¹⁶⁾」と述べられるようなひとりよがりの“innocent”と両方の意図を持っていると考えられる。そして『ヨーロッパにいるアメリカ娘には2つの階層(class)がある¹⁷⁾』と教える。このclassとは何であろうか。『一人で外出する』階層と、『そうしない』階層。つまり、未婚の女性としての規範を順守するグループと、慣習や他人の意向を無視して自分の意志を押し通そうとするグループ。classとい

うよりも type の方が適切だと思われるが、この点にヨーロッパに対してコンプレックスを持っている Mrs. Westgate の一端がうかがわれる。あるいは昇進 (promotion) ということを大変気にしている彼女のことだから、イギリスのような階級制度はないとしても、アメリカでも上流や、中流、下流といった階層があると確信し、自分はその中では上位に属しているとのプライドであるためとも考えられる。そしてヨーロッパにおいてはこの階層と、それに伴うルール、或いは義務を守ることが必要だと強く意識していると取れる。この規範を守らなかったのが、Daisy Miller であり、その結果、彼女はコミュニティの外にはじき出されてしまう。これに対し Bessie は『その恩恵を被ることもできないような社会の制限をどうして受けなければならないのか?』¹⁸⁾と抵抗する。精神の自由さ (moral spontaneity) を持ち、民主主義の申し子である彼女にとっては耐え難い苦痛である。彼女は「生まれながらに自由なアメリカ人として、好きなだけたくさんの間違いをすること、それが私の権利だと思っています。」¹⁹⁾と高らかに宣言している。彼女の若さや未熟さ、そして独善性がよく描かれている。また彼女のこの姿に、ジェームズのアメリカン・ガールのモデルとも言われるミニー・テンプルについてのジェームズの描写とも類似点がある。『彼女 (ミニー) はヨーロッパの粗野、イギリス人の妥協性や因習に対する生きている抗議そのもの、つまり、純粋なアメリカ人の成長の姿だった²⁰⁾』

Bessie の最大の過ちの 1 つは Lord Lambeth を彼個人としてではなく、古き良きイギリスを体現するものとして見なしていることである。彼女にとって “picturesque” であるかどうか判断の基準となるのである。相手をも一人の人格としてではなく、自分の興味の対象として見ようとすることは大きな過ちである。彼はイギリス貴族の 1 人ではあっても、その全体を代表するものではない。また、彼の母や姉のように特権階級意識をふりかざすような人物でもない。この点においても彼は『ある貴婦人の肖像』の Lord Warburton と重なり合う。しかし、彼女は彼の外面、外殻しか見ようとはしない。確かに外面も彼の一部分ではあるが、全体ではない。この点

は円熟期の『黄金の杯』(The Golden Bowl)の主人公の父親、アダムと重なる部分もある。そしてこの態度が Beaumont に彼女の意図をますます誤解させてしまう。彼女が Lambeth の地位や領地のことに余りにも興味を持ってたずねるため、単なる知的的好奇心というよりも、地位や財産目当ての結婚を狙う者 (fortune-hunter) だと見なされてしまう。

Lambeth の母と姉が Bessie と Mrs. Westgate をホテルに訪ねて来て、Lambeth は移り気で本気ではないと言ってこのアメリカ人女性の希望を打ち砕き、二人の交際を止めさせようとする行為に出る。Mrs. Westgate は儀礼的な会話の中で火花を散らす。この場面におけるイギリス貴族の女性の描き方はやや面一的で、同じ初期の作品である「マダム・ド・モーヴ」(*Madame de Mauves*)の年老いたフランスの伯爵夫人などに比べて、物足りなさを感じさせる。そして Bessie は数日経って、何の説明もなく、以後の Lambeth の訪問を拒絶し、急いでイギリスを離れ、フランスへと出発する。Mrs. Westgate は Lambeth の母と姉に自分達を追い払うのに成功したと思われるのを気にしているが、Bessie は何も後悔していないようであった。

III

この作品はアメリカ娘とイギリス貴族の青年とのすれちがいのドラマだと見なすことができ、当時のアメリカとイギリスの間の一つの挿話にすぎないということも可能である。しかし、この作品において主人公、Bessie Alden の意識の変化を見ていくと、初期の最後の作品である、『ある貴婦人の肖像』の Isabel Archer にたどりつく。

当初、Bessie の興味の対象は主に知的なもの、あるいは歴史的、“picturesque”的なものであった。自分の好奇心を満たすことばかりに熱中し、その結果、他人がどう思おうとも全く関心を持たなかった。これは彼女の単純さ、あるいは無邪気さ (innocence) と解釈できる。しかし、innocence とは悪意のなさと同時に、無知 (ignorance) にもつながる。このときの彼女は、自分の行為の結果、そしてそれによってもたらされる他人

の感情に全く無知のままであった。そしてその傲慢さにも気づいていない。

また、彼女は人生に対して高い理想を求め、それを現実にあてはめようとして、理想と現実の落差にしばしば失望することになる。これは Bessie が貴族に対して持っていたイメージと現実の Lambeth との違いのため、彼に落胆させられる点に現れている。しかし、イギリスで再会し、彼との交際するうちに彼の本当の良さが分かってくる。彼の健全なイギリス人気質は好ましいが、彼女の想像する貴族としての資質からすると、彼は退屈 (dull) に思えてしまう。彼女は貴族という地位に属する人間に対し、余りにも過大な評価をしてしまっている。結局、彼女は身を引いてしまうような結末になっているが、果たして現実はどうであろうか。

お互いの愛情にもかかわらず、Bessie は何の説明もせず、逃げるようにイギリスを去ってしまう。彼女の行為は困難に直面することを避けた、一種の逃避とも、締めとともれる。しかし、これは単なる消極的行為ではない。周囲の人々、特に Lambeth の母や姉がどう思おうとも、彼女は決して脅かされ、逃げ出したのではなく、あくまでも自分の意志で旅立ったのである。彼女の真の意図を釈明することも、更には誤解されたと思うことさえ、いとわしいと感じるのである。処女らしい潔癖さと同時に、プライドが感じられる。彼女は Lambeth の母や姉が Bessie の意図について自分達が知っていると思っている以上のことを知っている。表面上は敗北に見えても、精神的には勝利を収めている。ただし、彼女のこの態度は自己内完結的とも、疎通の欠如、あるいは、自己満足的とも取れる。他人の考えを想像する力は得たが、共感 (sympathy) を持つには至っていない。他者との対決は次への課題というように、この作品は終わっている。

初期の「国際テーマ」の作品においては、前述したように、登場人物の内面の描写が少なく、“comedy of manners”の要素が強い。本稿で取り上げた「国際挿話」にしても主人公の Bessie Alden をふくめて性格描写に物足りない点が多いと言える。しかし、彼女の意識の拡大 (expansion of consciousness) においては『ある貴婦人の肖像』の Isabel Archer の片鱗をうかがうことが可能である。彼女にとってこの旅は、『ヨーロッパと

いう他者がアメリカン・ガールに世界は単一なものではなく（分裂している）、あいまい（ambiguous）であることを教える最初の機会』²¹⁾であった。

『ジェイムズの登場人物たちは、その意識の程度に従って、一定の価値観を尺度としてその上にそれぞれの位置を与えられていた。』²²⁾この点を考慮して見ても、Bessie Alden は American flirt であった Daisy Miller と真の American Girl の始まりともいえる Isabel Archer との間のかけはしと言えるだろう。

注

- 1) F. O Matthiessen and Kenneth B. Murdock ed. *The Notebooks of Henry James* (New York:Oxford University Press, 1977) p. 47
- 2) Virginia Fowler, *Henry James's American Girl: The Embroidery on the Canvas* (Madison: The University of Wisconsin, 1984) p. 5
- 3) Henry James, *An International Episode* in *The Complete Tales of Henry James*, ed. Leon Edel (London: Rupert Hart-Davis, 1962) p. 243
- 4) *ibid.*, pp. 263-264
- 5) *ibid.*, 269
- 6) *ibid.*, pp. 269-270
- 7) *ibid.*, p. 282
- 8) この点に関してはジェイムズの他の作品でも扱われている。cf. *Daisy Miller, The Portrait of a Lady*, etc.
- 9) *The Portrait of a Lady* の新聞記者 Henrietta Stockpole などがその例として挙げられる。
- 10) James. *ibid.*, p. 284
- 11) *ibid.*, pp. 284-285
- 12) ジェイムズのホーソンに関する論文に詳しく述べられている。Henry James. *Hawthorne* (London: Macmillan, 1879)
- 13) James, *An International Episode* p. 298
- 14) *ibid.*, p. 299.
廃墟や荒廃した庭園などは“picturesque”なものの代表的なものとなさされていた。
- 15) *ibid.*, p. 288
- 16) *ibid.*, p. 264
- 17) *ibid.*, p. 288
- 18) *ibid.*, p. 290
- 19) *ibid.*, p. 300

- 20) James, Letters I : 228
- 21) Fowler., p. 33
- 22) F. O. Matthiessen, *Henry James: The Major Phase* (New York : Oxford University press, 1963) p. 146